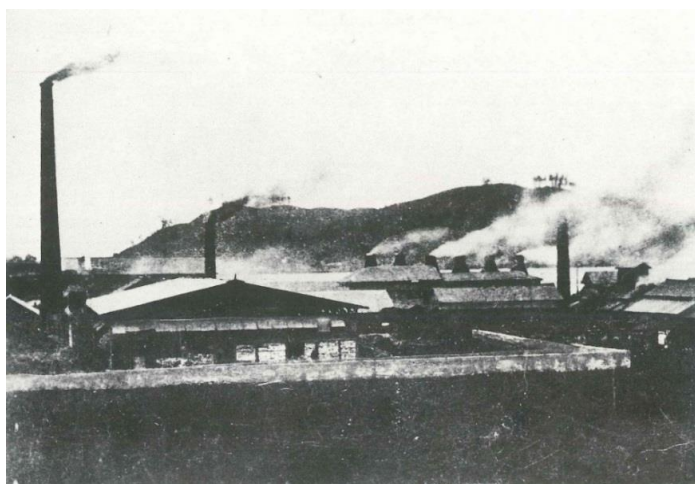


山陽小野田市ふるさと文化遺産

小野田セメントと 笠井家



笠井建次郎



笠井真三



笠井順八

平成28年2月
山陽小野田市教育委員会

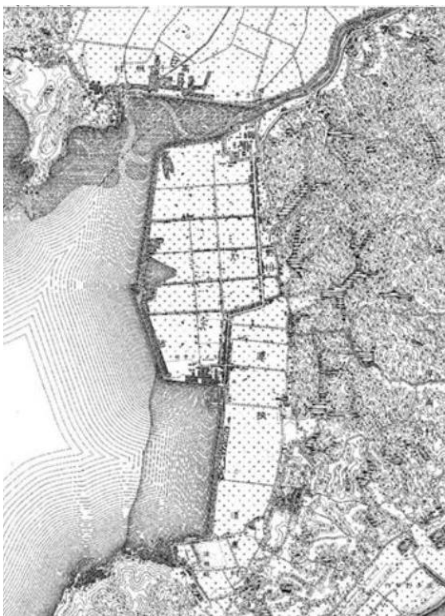
日本近代化の先駆け – こうして小野田はつくられた

かつて寒村に過ぎなかった小野田。笠井家はこの地を近代産業都市に変貌させました。寛文8年(1668)に高泊開作が築造されて以降、有帆川河口の干拓事業は徐々に進められました。明治になると、そこに工場が建ち、小野田は工都としての道を歩み始めます。明治14年(1881)、日本初の民間セメント製造会社「セメント製造会社」(のちの小野田セメント(株))が設立、明治22年(1889)には国内でも早期に設立された民間化学会社「日本舎密製造会社」(のちの日産化学工業(株))が誘致されました。小野田は日本近代化の先駆けとなったのです。

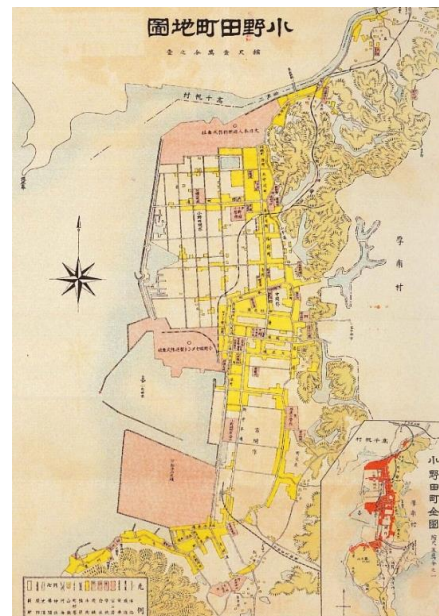
会社が事業を進めるにつれ、必要なインフラも整備されます。原料搬入と製品搬出のために、まずは港が整備され、現在の小野田港が造られました。また、小野田駅から小野田セメントまでを結ぶ鉄道が敷かれ、現在、小野田線の一部となっています。

整備されたのはインフラだけではありません。従業員が住むための住宅が建てられ、周りに商店ができて街が形成されます。人が多く住むようになると学校や病院、道路、郵便局など、都市として必要な機能が整備されました。

野来見や木戸・刈屋、目出など一部に人が住む寒村だった小野田。明治14年(1881)の人口は3,341人だったのが、昭和15年(1940)に高千帆と合併して市制を施行する直前には3万人を超えていました。まさに一からまちをつくりあげたといえます。



明治30年(1897)(2万正式図「小野田」)



昭和10年(1935)前後(山口県史「史料編・近代3」)

このまちの誕生に大きな役割を果たしたのが笠井家です。小野田セメントを創設し「会社と地域の発展は不可分」との信条のもと、会社とまちの発展に尽くした笠井順八、その長男で、小野田町長として長年にわたり都市基盤の整備に心血を注いだ笠井建次郎、次男で小野田セメントを日本を代表する会社に躍進させた笠井真三。明治から昭和初期までの小野田は、笠井家に牽引されながら歩んできました。

笠井家が残した遺産は、今でも市民の生活に役立っているもの、そして、大切に保存されているものなど様々です。しかし、いずれもまちの大切な財産として市民に受け継がれています。

笠井家が遺したもの

| | | |
|------------------------------|----------------|-----|
| 順八と会社の創業 — 士族の救済と日本の近代化 — | 竖窯 (徳利窯) | P 4 |
| | 蒸気機関・製樽機 | P 4 |
| 順八の人柄が偲ばれる住吉の丘 | 住吉神社 | P 5 |
| | 若山公園 | P 5 |
| | 旧笠井順八邸灯籠 | P 5 |
| 建次郎とまちの発展 — 寒村から近代産業都市へ — | セメント町 | P 6 |
| | 旧小野田銀行本店 | P 6 |
| | 小野田線 (セメント町駅跡) | P 7 |
| | 産業道路 (公園通) | P 7 |
| 真三と会社の発展 — 日本を代表する会社へ — | 山手倶楽部 | P 8 |
| | 笠井真三旧宅 | P 8 |
| | 旧本社事務所 | P 8 |
| | 住吉社宅 | P 8 |
| 小野田を見守る笠井家 | 笠井家墓所 | P 9 |
| | 笠井順八翁像 | P 9 |



順八と会社の創業 – 士族の救済と日本の近代化

明治14年(1881)、笠井順八は小野田に「セメント製造会社」(のちの小野田セメント株)を設立しました。順八が会社を立ち上げた理由は2つあります。まずは、明治維新後の秩禄処分によって生活の糧を失った士族を救済するためです。これまでの家禄にかわり士族に発行された金録公債による出資や、政府の士族授産金の貸与により資金を調達しました。また士族を従業員として雇います。そして、もう一つは日本の近代化にセメントが必要であると感じたためです。当時セメントを製造していたのは官営深川工場だけで、多くを輸入に依存する状態にあったことから、順八は「外国の泥土(セメント)を以て金貨に交換するは実に国の為に慨嘆するのみ」と考え、セメント製造を決意します。

順八は工場建設地に小野田新開作を選びました。明治4年(1871)に干拓されたばかりで広大な荒地があったこと、セメントの原料である泥土と石灰石、燃料となる石炭が周辺に豊富に存在していたからです。

「笠井さんは人夫か社長か、ごみにまみれて共稼ぎ」と謔われるほど、順八は骨身を惜しまず働いたといえます。明治16年(1883)には中心設備である豎窯(徳利窯)4基が完成、セメント製造に成功して事業の第一歩を踏み出しました。



● 豎窯 (通称：徳利窯)

明治16年(1883)に建造された最初のセメント焼成用の豎窯のひとつで、焼成部分と煙突部分からなる高さ約18mの煉瓦造です。形が徳利に似ていることから徳利窯と呼ばれています。当時は煉瓦の入手が難しかったため、順八は窯を2基築き、明治13年(1880)から煉瓦を自家製造して豎窯を完成させました。

火床に松の枯れ木を敷き、石炭を載せ、その上に石灰と粘土の原料を載せ、また石炭、原料と交互に12段程度積み重ね、7日間焼き続けセメントを製造しました。
※国指定有形文化財

● 蒸気機関・製樽機

創業に必要な機材は大阪砲兵工廠などに発注され、蒸気船によって輸送されました。その一つ、蒸気機関が豎窯(徳利窯)横に保存展示されています。

また、明治40~42年頃ドイツより輸入された製樽機も展示されています。当時、セメントを出荷するための容器に、木製の樽が用いられていました。



順八の人柄が偲ばれる住吉の丘

小野田中学校の校歌にも歌われる「緑こき住吉の丘」。順八は小野田を眼下に望むこの地で生活していました。

旧萩藩士である順八は、有数の経済通として財務などの事務をつかさどる要職をつとめ、廃藩置県後も山口県の役人を歴任し、県の財務や勸業の発展、士族授産事業に力を注ぎました。しかし官の限界を感じ役を辞した順八は、工業の振興と士族授産に資する事業設立を志して小野田セメントを設立します。当初は仮住まいでしたが、明治27年(1894)に、一家をあげて山口からこの地に移り住みました。



●住吉神社

明治20年(1887)に順八が萩の住吉神社から勧請した私祭社がはじまりで、明治32年(1899)には社殿を改築、明治41年(1908)には小野田セメントの鎮守社となりました。

境内奥には毛利忠正公霊社があり、江戸時代最後の萩藩主敬親公を祭っています。順八が青壮年時代、藩吏として絶大な信頼を寄せられた旧恩にこたえてその霊を祭り、毎朝親しく二神前に祈誓していたということです。

●若山公園

春になると公園全体が桜でピンク色に染まる若山公園は、順八の私庭だった公園です。大正5年(1916)に開園、昭和9年(1934)に順八生誕百年記念に際し小野田町へ寄附されました。公園の中央には順八の小野田発展の功労を讃えた頌徳碑が建立されています。

●旧笠井順八邸灯籠

明治33年(1900)、日清戦争後の恐慌で会社の業績は不振に陥り、更には多額の使い込みが発覚しました。「部下の不始末は社長の不始末」と順八は社長を引責辞任、九州に隠遁しましたが、それを嘆いた小野田の人々は寄付を募って千代町(現中央福祉センター)に屋敷を建て、順八を再び迎え入れました。

この灯籠はその庭に建っていたもので現在は住吉社宅の庭に移されています。



建次郎とまちの発展 – 寒村から近代産業都市へ

順八は「会社と地域の発展は不可分」との信条のもと、日本舎密製造会社の誘致、郵便局や警察分署の開設、道路や航路の整備などに尽力しました。石炭産業や農業の振興にも尽くしています。明治14年(1881)に人口3千人あまりの寒村だった須恵村も、明治42年(1909)には1万人を超え、町制施行することになりました。その際名称を小野田セメントなどで使われている「小野田」(注1)を用い、大正9年(1920)に小野田町が誕生します。

順八は大正8年(1919)に亡くなりますが、その意志を引き継ぎ、都市基盤の整備に心血を注いだのが、長男で小野田町長を17年間務めた笠井建次郎です。就任期間は大正10年(1921)8月～昭和13年(1938)9月まで。その業績は多岐にわたり、小野田港や鉄道、道路の整備、水道の開設、日赤病院の誘致、小野田実業実践学校(現小野田工業高校)の設置、小学校の整備等、小野田が近代産業都市として発展するのにどれも不可欠な事業でした。

これらの事業には小野田の人々も積極的に協力し、ともにまちづくりを行っています。



●セメント町

干拓地が大半の小野田は、明治時代初期まで多くは田や荒地ばかりでした。そこに小野田セメントが設立されて、事業が軌道に乗るに従い付近には社宅や寮が建設され更には商店街が形成されて、工場周辺はその門前町として繁栄するようになりました。

「セメント町」と呼ばれるようになった時期ははっきりしていませんが、明治25年(1892)頃ともいわれています。明治33年(1900)には村役場が西の浜からセメント町に移転しました。

●旧小野田銀行本店

小野田銀行は、順八が地元の商家たちから須恵村内に銀行がなく困っていると相談を受け、明治32年(1899)に開業しました。その後、建次郎が頭取を引き継いでいます。大正12年(1923)百十銀行と合併、さらに昭和19年(1944)山口銀行小野田支店となりました。

大正元年(1911)に建てられた本店新店舗はコンクリートブロック造で、現在は山口銀行の倉庫として使われています。



注1：小野田という地名は享保19年(1734)編さんの菽藩の記録「地下上申」に、小野田御立山や小野田堤で初めて出てきます。場所は目出から住吉にかけての丘陵地一帯です。その沖の干潟は小野田潟と呼ばれ、そこを干拓し小野田古開作や小野田新開作と命名したことから、徐々に小野田の名前は広まり、村名の須恵より広く使われるようになりました。



●小野田線（セメント町駅跡）

美祢の石灰山からの原料を移入するため、大正4年(1915)に順八らが小野田軽便鉄道として小野田駅～セメント町駅間4.6kmを開業したのが始まりです。住民の要望もあり、旅客輸送も担うことになりました。セメント町駅は工場に隣接して設置され、工場構内には引込線を敷設しました。大正6年(1917)からは建次郎が社長を引き継いでいます。

昭和4年(1929)には、建次郎の尽力もあって新沖の山駅（南竜王町）～沖の山駅（宇部港）間が開通、更には昭和12年(1937)の雀田駅～長門本山間の開通などを経て現在の小野田線が形成されました。



●産業道路（公園通）

小野田の街路の根幹をなしている道路、丸河内～公園通～小野田駅間は下関宇部間の産業道路として整備され、昭和17年(1942)までに完成しました。当初は小野田をごくわずか通るだけだった計画を、建次郎の尽力により、小野田を縦断する現在のルートになっています。その後国道となり大動脈としてまちの発展を支えました。

真三と会社の発展 – 日本を代表する会社へ

順八が創設した小野田セメントは日本国内はもとより、朝鮮半島や中国大陸にも進出するようになります。その中心となったのが、順八の次男笠井真三でした。明治23年(1890)ドイツに留学した真三はセメントの技術を学び、明治29年(1896)に帰国、技師長、そして大正7年(1918)から昭和14年(1939)までは社長として会社を牽引します。

明治33年(1900)、増産に応じるため、真三がドイツから技術を持ち帰った新鋭のディーチュ窯を備えた新工場を稼働させた会社でしたが、その直後、日清戦争後の恐慌で大きな打撃を受け、翌年順八は社長辞任に追い込まれます。会社はしばらく停滞期を迎えてしまいますが、状況を打開すべく明治40年(1907)ディーチュ窯を増設しました。また明治40年(1907)に中国大連への工場建設を決定、その後も朝鮮や満州に積極的に進出します。大正2(1913)年には従来の豎窯に代わる回転窯を装備した最新鋭の第二工場を竣工させました。これにともない創業時からの工場は廃止され、豎窯（徳利窯）もその役割を終えています。

その後、第一次世界大戦にともなう好況によってセメント需要は増大、設備拡張は進み、昭和4年(1929)までには、内外に5つもの分工場を有する国内最大級のセメント製造会社に成長し、「小野田のセメントかセメントの小野田か」と言われるようになりました。



●山手倶楽部

眞三がドイツ留学より帰国の際、英国から持ち帰ったコンクリートブロックの型枠を利用して大正3年(1914)に完成させた、大正時代を代表する洋風建築です。外観は古典的デザイン基調、内装は華やかで、大食堂、応接間、寝室などがあります。当時は社交倶楽部として、現在は賓客用の宿舎などに使われています。

※国登録有形文化財。



●笠井眞三旧宅

山手倶楽部の隣接地にあり、同時期に建てられました。正面は洋風の倶楽部と構造やデザインが同じで、一体的な空間を創出する配慮がされていますが、後方は南側の和風庭園に面して和室客室2室、中庭を隔てて和室3室を設けています。



●旧本社事務所

昭和3年(1928)に建てられた鉄筋コンクリート造2階建てです。デザインを重視した大正建築の思想が強く反映されており、外観・内装共に建築当初の姿をほぼとどめています。国内有数のセメント製造会社であった小野田セメントの本社建物として、その風格を感じさせます。

平成6年(1994)の会社合併にともなうて本社事務所としての長い歴史を終えましたが、現在も関連会社の事務所として使われています。その他にも、工場内では、明治・大正期に建てられた建築物数棟が現在も使われています。



●住吉社宅

大正13年(1924)に会社の重役社宅として建築された木造側壁コンクリート造5棟のうち1棟が保存されています。赤瓦の住宅は、当時モダンな建物でした。

建物の保存と活用のため、ボランティアによる保存会が結成され、改修を経て、平成20年(2008)以来「龍遊館」の愛称で様々な市民活動に利用されています。

小野田を見守る笠井家

順八が小野田に会社を創設した明治14年から、建次郎と真三が相次いで亡くなった昭和10年代までの約60年の間に、小野田は寒村から近代産業都市へと飛躍を遂げました。3千人だった人口が3万人になるのです。昭和15年(1940)には高千帆町と合併して市制施行、石炭産業や製陶業の隆盛とその後の衰退という大きな波はあったものの、現在でも県内有数の工業都市としての地位は揺らいでいません。

小野田セメントも、太平洋戦争後、大陸の工場を失うなど大きな打撃を受けましたが、その後復活し、日本を代表するセメント製造会社であり続けました。

残念ながら昭和60年(1985)には小野田でのセメント製造が中止され、平成6年(1994)会社自体も合併して本社が東京に移ります。

しかし笠井家が残した遺産と意志を受け継いだ小野田の人々は、更にまちを発展させるため、新たな方向を開拓し、努力してきました。笠井家はそのような小野田の人々を静かに見守り続けています。



●笠井家墓所

南中川墓地の一角には、順八・建次郎とその家族の墓があり、小高い場所から小野田を見守るように静かに眠っています。建次郎の妻孝子は厚狭毛利家から嫁ぎました。

真三とその家族の墓は同じ南中川墓地の別のところにあります。



●笠井順八翁像

民間初のセメント製造会社の設立だけでなく、「会社と地域の発展は不可分」との信条のもと事業を発展させ、現在の産業都市山陽小野田の礎を築いた順八。その徳を称え、昭和30年(1955)、住吉神社境内の丘の上に高さ3mのセメント製の像が建てられました。

球形の大理石を見つめる姿は、秋吉台の大理石をいかに利用して福利増進を図るかに苦心をしている様子あらわしたもので、今もまちの発展を見守っています。昭和55年(1980)には唯一の名誉市民となりました。

参考文献

- ・小野田市史（小野田市）
- ・小野田の銀座 柳町と有帆川（小野田市教育委員会）
- ・回顧七十年（小野田セメント製造㈱）
- ・笠井順八翁小傳（笠井順八翁頌徳会）
- ・笠井順八翁とその時代（河野豊彦）
- ・旧長州藩士笠井順八の企業家活動―士族授産と近代企業の形成―（畠中茂朗）
- ・近代遺跡調査報告書―軽工業―（文化庁）
- ・創業五十年史（小野田セメント製造㈱）
- ・ふるさと小野田（小野田市教育委員会）
- ・明治における二重の創造的対応：士族授産企業「小野田セメント」の事例から（米倉誠一郎）
- ・山口県の近代化遺産（山口県教育委員会）
- ・山口県の近代和風建築（山口県教育委員会）
- ・わが町の鉄道史（小野田市教育委員会）

ちょっと足をのぼせば

○つねまつ菓子舗

大正14(1925)、セメント町で創業しました。明治時代に製品を搬出する容器として使われていたセメント樽に因んだもなか「せめんだる」を製造、販売しています。



○歴史民俗資料館

昭和57年(1982)に小野田セメントから創業100周年記念の寄付を受けて建設されました。小野田セメントの歴史を紹介するほか、順八の遺品、順八への協力を惜しまなかった井上馨の書なども展示しています。

また、古代の土器から一般庶民の生活・生産を語る民俗資料、江戸時代からの開作の歴史、製陶業、石炭産業なども紹介しています。

